新板
繪入

雷神不動櫻

之巻

遠13
1914
1

三木与

序

時代感じてハ色も淡と淋き別き紙
惜む為め声〳〵雲の中霞の
月よ艶る樽幕那波津去
芝居丸繁昌記なる太鼓乃
吉ハ富神不動狗も吉を
内る市川が武乃澄切と口上ふ

へ遠13
1914
1-5

書て遣る末戸ハ大入形集ハ
俳諧と夢作ハ書接
く芸面ハ矢ハ助る好悪ハ
と人の巻と明ハ人宗長ハ
長ハ俗作らめ

八文字
自笑

寛保三
夏の日ハ
俳諧
真笑

雪神不動櫻

同緣

第一　代下紙解て見せる若衆の事

引きめさ物ハ踊さ者ハ間
長子ハ侠ハ踊ハ作る三百ハ
俳諧ハ大宗と接ハ別の花文

一之巻

第二

第三

一心の下級解てりんせる業障を懺悔

特云。業障滅せざる業障を懺悔

飲れた人もくどく悔しくなれば、ものはづかしく人の嬢とて人情の表りは
あくまで青より紫、婬声は耳へ入りやすいといへれど、孔子も
一二三ハ廓がひとつあされしゃん、鄭声ハ淫すると申されしぞ。其里に
あそびずして三味の音色を知らずは、いかなれど人へハからも恥をとするぞ
座敷大八ぬれても算盤枕かし。其にても廓の事ハうかと志てまぞ
女郎のゆきぢを知らて、女房より外の体の身へ転で嗅でも
乃ぞ、大座敷より、川で伊勢の紫菜中に又、床の歌、みなおつたせて
なれば中花をけ、女郎の酒宴、三味せんの二あがりにんハ有頂天と
なりぬれバ、客の真さいく、さ春こんと、お座の事情が抱き子に会。
鞍を置く、張する廓の光れんとのし、鼻毛をのむとよう女やが床の小
さびくれ枕の大臣めの、見の、くぜつかの一子、小地の中お表の一子小ちの表風と軽男。
気の利きの三弦弾き出る一ぬで、当ても其座の勤めくそこく、父

表の月と共のびんし里へたよつきとそつ、家老も来客氏がら事の妻でもなし。
志げくいさもれせ止、今ぞと酒よの屋敷の流碑みやして、腕も膝を枕の
さて後おてうまかりつる、韋駄天まりして三味せんつる胡弓や笠経の
調子揃ゆるみしも一勝のよい毎金の威光、稀おいみし一への芦生ぞ旅ハ糸
三味線で振ハ靱、郷花の枕ようなるうかすれのでぞ只く見ぬ。表風酒の砕を
砕あるにやつり月とゆきて欠びする三味線を枕へりとかかれ
肝をつぶす、蒸付けは、コレ三よりしの二か、くが、帯ハ何れよ表やでめ
ちく、数急く嗚されて、は、流れ滞りにて、節でも作出す、げんえの腹の張り
やも、お花と金がろしれバ、されはいかれびしおするれる、まま出しひまされ
さんとかまへてのびみとうさの時さる、田舎大尽でござるろへ
さる、毎秋の揚げの、やすまやしなど、れと帰まつまぬハおやとがくみ
袖の袂で、人の方へか、さも、おやござるる花のれきぢんうかす、ぴり里へ参ひ

みうらの
ちやうの
ちやうの
こどもの
こどもの

ろさう事もあるぬとらく分限ぢや其ほどでいるゝもひろがりし商ひぞ今ぞ家
れ月ゞの此頃のれかがらくとあり今帰りていひとむ方あり田舎の者ども
もし勝勘せしぬすそ知て家やかれバ後おして忠(ぼ)かり平生さんも
女房はもとよりいはおやそとの本家でいせさん今とさし存れおのいやす田舎の男で
に紀どる七八九八ツ半の勤実でありてばかりの人々の手前勝勘せられ此ハ代さん
せぬおよく今よりはやりの中の事にまきれすけれバ又宗とかすく今のいかわ田舎者で
の上中もし家ざ存ぐえ今の兩ざ金とかきてでも是をして中やうらく風景あひ
いかれさその金をへ八様世人金をどうれどひぢる勝勘せしに払ひうぬ様任
まとれば素子好がへ今日は一日てへ金あつて不る立ぞと言あつゞそぬくと後生とく
いすへ二百両をといへ金がかけどもその際といふく今ちもさ気そやうかりそ
ろうはぞどや今秋ハ宿所へ御入今のおも免き立て入よ下て立あかれぬぞ存ぶ
いふハ京若労のは御とぞれあるバれ御りあれて田舎大かたよりも大へ主し城

後出さ金とを付あつれおや方へ御供しかまれがまりして大金を借されれの
工面をとりすすめぬととも今へい両ひまとれバ(?)神棚を柳木に
子づかれハ此お後とハ家ほも知もどぞふつさうやうらと育ハ見れのおやハ通り
御の中へ守ても金をうれば去風ハそえてぬ敷なれ候よとかしうるもの弁て
と家の弁当ハ御かうをうすむともへて気なしひあうりすとも早く見ればかまきと
又後進行あて一下て妻の主主者あへハ気かやうへまかくつる世御が家頼
まだて此湯うる殊され共世さぬもどうれ用心もおしくぞもくや家中の縁ぞ帰り
まきそうもしい世えの風いやくまなとて用させもあれぬおわりそ世ゆるが此
吉此かゝる好らさ前御座の中門と言はまさてどぞ御ふま所敷しう大れハ一両で
入二百両の金をかくかく御とそので延引せバ田舎の家金とにこ若ものと信せされて
家ハ元ハ人ヒぬ拍とぞヘ思ひまへやうと猿んせられて一人物とさりて居るふ
れうずこ去拝ず歎すちとやわの中元飛せうすけれ今年の居る風れもちへて

此間に掛りし此ざうの事をぼごろつきどもに取つぎさせて下さるなら廿と
源氏兵衛とて名高き遠山ゆへ[illegible]風の耳へ入てやかましくいふが主共が気は
ていさいおハでしひまなく業ものの身を見びへめをさらでおかぬのくるハ
げよひざれまかんぎやくのおそふたぶよのぜをもたと見せびた御見せ仰ぎ声とて
主よ逢ひて八郎の中で抜身を肩にかけまへはしれうれへて表に何をせ。
身をもちくしおまへのとも引こすハ田舎へまさにけふに見へてもとはよし
まちと私しはくろふたりのすかれざうゆをとがめ給はんとやかて抗の
何れもが名を聖人の道をもやげなされ出入の衆をとりしみて抗のなれ
ふとひかりうへとかしおまへからよくたれかれてせはしく見て舞を
まことに真綿にぬいてよくハやる風と気せりしに茶をてせくいやる六
何も真に三杯づけが男のよそで人ひとり泊まれバされバおまへの此判株の
大事みなのぬれ事でおまへもゆるしなされめしお田舎九

大そうけさく方にて三右衛門と此らんなまへの家のかれにいてもぐ
かり積まれて中の事のかれなれバおまへよと三右衛門ハ深くひけめにまへも何とも
おまへの方へ身請でもいたされバひとさきへまるひの掛りがその田舎へ
大それた事を言付へ三度とハ此身の内三右衛門と身請すれバこれ田舎
又おまへの身の中へ出すそ三右衛門外へまいりたれバ出来るへ身請なされ
げとれん今度全まの内見えし様が御破の[illegible]
御しきれバ私へハ気の身請をさせて来る下女のその男の出入ハおき
内をそれおみれバこの気はとかく見えず三百両の御金が調ひまして此ざうゆ
もとろう御し此ほど此とも見えかずの事はせれれ様まへは三右衛門あの
ちへ身請をなされまでおぶこちれは何とが初の足にてそがうの事と思く。
真の御それは此ござ面に三人手と見やでのこれバそろうとせと
きよるとしあ大きが二百両の金ハ相まこ三よことしれるそそれだ。

小前とうこうげ小幕を用ひうしかされば。祖父今の世光の幕を用ひ
ぬ。あまあわせを屏風にしてもめれすを。口をしてハ物ヤすを。
り紙をひ〳〵イヤされ表化三百年の昔光の幕を用ひ
ぬ。でも人を人幅ハすり物なれと。当初の御ハて包しをわれ。
絵きコリヤ表化。此雅冊をそ実て書ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
小社のよう実でよりハるを表の雅冊。昔ハ此の衛ハ人。
天人なれ物ようて表悪の雪ひの時ようハ年。ハ。ハ。ハ。
の長年ハ代のみる年ハ。年ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
あ雅。当分三百年の変りハ光をハ方ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ百人今ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

うけれよ〳〵ぐ〳〵ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
に実人ハ沢ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
表化雅冊とする雅冊ハ。化表ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

まことそふなふなされませと。件の雑用を懐中しわきにはさみ立ゆらね

（二）誰をかれ廓の沙汰ハ三ヶ津が全盛

梅の花の桜の枝の附ゆきく。さと情を添てある。今をときめく花さかぎ立
うち遊女の艶事へちよとやや谷主一趣向とせるひかし此の新宅を
いちれ人とそ。尚今此れお仮の出見まで雲のまよてそんじて衣裳をまひ
お〜全盛の事にしむらちぢりきんの頭巾。黒羽二重の小袖を着い
扨此里がよひする輩は。かさ立たる風俗の大尽とはいへる人ハ嬉。
大門より来客の姿もちぢひかく。きつかけ出立る人バ黒い衣服のひらりと。
おのづから来れる人てぐす客のまねとハ手をかえ珠も出揃ふいわるまじ。
者のぐるりにハ。おゐ客の花見ぐしとなかわす大尽郎りみがり浮の顔に
八百屋流の着る品市九郎年りんでい客人の口利利を着す皆の眞直と
すぐひ浮まうり紀立さいぎの御手。大尽を手に乗て客をあてろとなまりして

のあひるのハ歌生れまのが出の帝位も恥ずさとのさ帯おかりおおりしほて帝家よ
佐渡流ぞもし。汁をすゑ立ひしぶん。此ひかとしわいすと立ハ。帝位もわかりら而ち店とは
大門中の揚屋へと送りこんさする田舎家来荒比浮亭が証拠て飛だしし小
此里へかよひしと。手前への客人三ヶ花捏をおそんらい。客人が遊郭ぬまるまん。
又ぬ者よこがれ師もとれかの三ヶ花捏が殿郭の一月んさいで。いち浮もとらへと
佐れれれでも田舎代ゑの下旬の小遣ハ御前まで明ける価を乾へてとりつ田
老代比と中えば此の座まで尾のげ尾ハ手ひ岩。出名事の母と遊郭なりしバ。
御行手。御待ぬハ此への下とれの丁重ハ。まる尺あひおヨ利のかるそふ乳
ていう母しやすぐ客人へ見ひ出しれから当のわすでハ今い。来客でけなびしハ。
手前まで文の三ヶ花捏とりて大尽。客人く敗離を勝しとのるす家来浮ち七る
が細微らそこそよう都の。来りんぞわよりし廓一本の揚屋三ヶ花捏ハ
会席の一本きぬムラ咲立て。かの三ヶ花捏比ハ下捏のまる風といふ大ぐらみ。

鼻毛のばして揚詰して室へとらくて口説ありかくる所が揚詰にして
むつまじくはなれ事さへぬのゝ内気ハ親の目をぬすミぬるを今揚銭よりつけまつるハ道。
げにきみとかうをとるハ桃灯と釣をもつ月ねよりさる所もちぞひけり字わ。
仰ぞ至一ツとのそれ対面へ任んぞうまい。そが南座のかわりびてきと。
栄中の御纏へをくらおしまへハぞかに押て治大夫御今ハ公家のわれさう
ずれど今を揃御客ひろひらんで表組がおまへ達やちんちんへとりげかせべ。
表紙ひろ所して見るハきやりがるれかりびぞ。此中ハ手続して吹かうの黒書
る対面致しますせうんでが様よかのの御名代よりちからひの御顔の大さ。御髭の
もとる御帝おへねの御大臣それば此座花美と顔ひらく此遠宵ハやつされたまでも。
あまひらの難儀が御難ります。ぞれります毎りかの三百弁これすれハ
此文六するお中様のうる風雅しや御あ。語あして奥れよあされ人のる
すそ。私が言れ頼りて居りますと勘定あでしかの御かあへハ遅せ給とるまを
許し打てひ御らんで三百弁れハ御やめて揚げし御のお文れをとつまるりるも。
おやれ御客帝もハ又えしの指すハかくぬ。気を連ば上よ御存りますれバ御をと
此御身よ任んぞ莊ハうまし而て扇を手れ御付きもがまするんくとおう
まづきつら　扨ハ三百弁が中ハ京が指帝のれく要の青扇が箔出をよれ。
コリヤくて此西をふみのくる風ハ釈去なが迷ひ月報を思んでやらく
中座の座そくうがよりそ花出花具。三つものを揚詰する今の出席さく
会見がわぬまで。三百弁をを語ハまとと八経説。ごろくる会ハかけあし地
ハ身付ヤらハいよしくもんなさとの多へでらや御今ハ御まで伝る事お花。
此経舞が内様の家此言實出断面がすれ気のも紙三百毎の有経会の
動りまで御ふ此製御拍の伝わて至御して御伝りますもぞ其御今の方ぞんが
あらぬうり目張がきれ中年すると。此経舞ハ歌らが詞。秀らが拾ける情も大字の話
もし酒乗乱るる風流の真率の鏡えを戴て至御をし。伴の経舞さる

とく流へとうり出してまるいとすれば。ぼうと大きにおどろき笑くなる
びーふぢの系あ伝れ主字。まるれくまの系の八著は常の小町ぶかされ
とおりし実の姫舞指てんてら流くしまとぼまれてたりまとぐ伝ぶで
に竹伝め兵のひしぶのあ山ものを花とをくめされコワヤく表花ぶる風が
才伝金て流と月限いろとるとしはるぶ表花ゆうる風れの以金と
伝れ。山姫舞と尻ーまする河宋八今日流ぶ。光ぶこまるれば山姫舞を
ぶれとまは。笑人ぶあをば養て住まの方で出ぶうゆまとぶ。ませて
果ど　まてーぶる風が金ぶ河個へど。月限ぶのびまとば山姫舞八とらぶは。
笑人ぶれば美ぶまぶ。いまとくーあーひぶ伝ーまる伝ンが
姫猫ぶ知て。郡ぶ拾て居て役ぶ主ふ八ぶるまとて表沈て出ぶう
ままとい八ぶーーを笑人八ぶまとぶる風ぶ三四毎月伝金一日でも延引
せば。を三四あでを姫舞八出ぶーて中んさあ中てなけ考んくーぶは

拾ぶのまは伝流ぶるを拾。一度ぶ伝ぶ伝ぶ。
月の三拾ぶ。ぶ毎の月まりぶるふ表ぶやるふいまを表拾ぶけ八。
月ぶかぶるくおりるひとふ。ぶ伝ぶくーぶ。
二ぶれ。表の智てまを三味せんやるて表ふを月の考ぶでふまん。
とまれぶまみ表の表でゆぶるまんすまぶ。ぶりまぶ考ーせふを月く
おどるき実八ゆるる表八ぶる。ぶ表の拾ぶ八ぶるまを八れば。
伝ぶ表八ぶまんぶゆるるを伝ーぶ。ぶるを八ぶ表ぶ。
いぶまてまるぶを表八ぶ大門ぶを表のぶまみれぶ。ぶ表ぶ深ぶ
おるりませんと。ぶ表ーぶるーぶまを表ぶを三ぶ表ぶ表伝ぶ表拾て。
表ぶおゃまーまる風ぶるの表ぶし姫舞八ゆゆ切ゆ表中まを表ぶる風
ぶ。金を拾ぶるぶ八ぶまぶまを表ぶまを表ぶ。ぶ表ぶ表ぶ表ぶ表ぶ
ぶ日切八ぶんまを表ぶ。ゆ表ぶ姫舞ゆ表ぶる表ぶ表ぶ表ぶ表ぶ

すせのうくらんで。まづ大きに悦び。ソレ切とハうまいせんさく。我がよさ
れバ猶お。三百両の金を手にとて。これ絵冊とハ此の内より路を
家来を呼せ。拵より黄金三百両耳をそろへて喜兵衛がおさまりぬ。
これも首尾よく拵を金もあればこそ。三百両と調へて家の大事の
主の宝物。人手に渡してもあるにそれとハちがひ何ばかりでも金
の目出度がよく天子の化ん見れど有て平人の及ばぬ物なが
やよ福の神とやさんと白鼠とやさふ字と世の諺にまでなる。
千年も万年もと祝ひ出を祝ひあへると。かの絵冊をまづ撿せへかけれて
殊に申し事には喜兵衛が門に入られしが。我身のあれバ合いでと
皆家の者にて押されぬ。家の門の戸をしめおひ。納倉の中へ入
ひつくりかへりやうやう三百両の金と戸納へ入とき
錠前をかけ。見れバ絵冊ハ見へず此中の中

喜兵衛の手をとらへ。かけて家をたゝみて寝姿。寝顔どふもいへねと。
喜兵衛とはなしけれバ。三百両の金子を立て。コレハどうしたら
見世の寝ている所へとびつくりして。さつぱり此金ハそこに
何ともいふことができず。喜兵衛が身をあてゝ夜着をかぶり
たまげてゐる。三百両の金を見るに。おどろきあきれて。
此家の事ハ。九年此かたの事。女房でも
なき事にておき。ひとり娘をひかせて子どもの喜兵衛が女房とさせ。
此家の喜兵衛の身に。小判の金を大事に持て
ふところ。何のことやらわからず。金持の心ハ。なぜそふなる
のかとひとりで思ひ。喜兵衛が子ども。このむすこの
はなしを。喜兵衛が子どもとしてもおそろしく
ふところの金ハ。喜兵衛がまへに置て居さつきとちがつて

どふぞして一冊はまそへ酒来ぞ。今では三方みの今は調とぞかまへる
紙で書きし方するは。今とその其れ細く呼ぞあちらへます。
ざれも新宮もよろしくござんせんとそれは元気でちらつひ。
ちよま風つん中書ども。そちらすれぬ根元を見せうと手柄よへる
三方あと名も。コレ芝居見物くる風流と新東して今の調ひは其の
事とぞ稽古十なり下で。日限のみ場より一日でも日々のびきでは咄のあれ乃
左まで宗右の絵冊は種々が稲する其形の女とぞ在せしと家々次第
るるは。今まで今のきえも出来ぬ中に所のはたもまひそれより人の名前
の絵冊は毎日宮の王子名とりて大名は。三方あまで書でそれこそなる。
かの王子れの上へ出る傳合の書き見れば出まる名とりて人へかまする黒はして。
髭をも哭ながら在主の禁令日本の弁舌は惚おとろきひとそ稽する
髭男も存生のするそ妾がそれおする人の女房は有りけり。

弟子にるいで一寸かひてハそれとても仕合せとして大器ちと後家もるす。
所で三足で傳ヘしやうの芝でいひますは。せば三君は女形よ元祖の中の八載
座りてすると平は胸そろき。後々の風雅よ新ら大家の中の此かの絵冊
有つても書き王子名れに書て。けふの名を王子れの吉の名はものとうと肝とつぶ
せし新族をまさ今は事の御りまは。今も迄その名も書かれのん
まみせれはあされ其ぱ。後公とは。ハ三元はまず今はても是がなよかこそひ。
アワトりふ心庭を見出ざ。ハまあれく三方あとを書でし。その気とも事しがあまり入かの
名分は絵冊も家々が無の寒家はとうく左風が今出ひ切ぱ一紙
此の家々が女房お出でてもひとひ何と世まわずで。ござる如すりやでこと
あるまひとお方はあれハ又流がきてコレ元禄はたる風れとは二世こそ
医めと言出中お方のひょ春さがふも王子あれよきさがも因縁りて玄風は（義理）が
立まいせぬ其のれ分まかりひんやとさげて在る三吉辛でハれざん女あそれの

女房と添じやれにやつしゆうなでつ地紙がくやうにくしとかさいはけんかまうなせふ。
やうありたれ共心ともおもうすると。顔へもみぢれ能因川かごうわねはち
んまきわきせずとひえうせば。手紙ないとひのかわて行すれねもおそずとひ女め。
あまちやでからくすひよひどい月をまちせてくまへと。みどれ有るる筆なつ九
とあかれ本へ表の方に人声てい左右より手紙ハ内ふとせつてみげらへ
てすりうとなつて絵筆やんしゆ年きて筆おかずぢどんぐり眼をひつくり
返して居たりぬ。

三

紅屋徒の人々ハ光のみひめけんず
風鳥の思ふことしるとしやへハ蝙蝠の如くに傍へもうひるとも近へ附など
ねぎれハ思不屑の如くに不礼せずする事。今古是より世の中の風也。
紅の家中は纏舞とやらせやのでゆせに擬しみ傾城みよしみへと
動けあわれしからふりして言ふもの今まで。御座へ纏舞とおぼへて三春

後はえんと能呑気を見せられまゝえ見ぐるしがれてつるえての今の御くか窓きそ
事なりてねハ此家に来奈良紅が女房をたのみてわすまを言はるまを御へ
くれよと頼まハ元来気が厚き女房なれバやかて言ふまいそのへ
表向すひもとえへ入るまをおとどと挨びの言ふまを勝連て廊へ
急ぎ来りてとせやの門より汗おしぬぐひめつつと入て奥作にまさらひ
といひけれバ納戸の方を見やりておつめも車中房より手がかりまた出迎ひ。
見れバ狭いひまで風みれおれでハいかなる顔の中を居まするかわしいかさいたよ
かへじて居るのはさびちんれ手すれ紙を見らく御かしや。三春がふすふすと
れさんでござります。ねの三方しにれれと屋清ぎらつ。御今の表ハなうなん
ぎれまして。其の御内ハ定まる今の紙すてつまれ御ざりませよるんれあずり
みされませ。三春がれもおまへの思ひあけくれはみずでハ参りはしてが嘘
お眠びぐれぶりますからもすかと奥作がのいふ子へとそし世悩ませて

もし車があいさつよ。喜風を娘びあひ婚姻。今月今年も来て来さゆへ
ていしゆはあまりて焼がゆくさ。先ちやうと喜飛をよんでめさせてさすれば
あまり六ぞれうやうべ申おもいるさいぞ喜飛ねとよんでよこまさせて江戸に住
んしする所にて以名喜飛欄間第ゆ来がうて縮さしなおく太様端太郎所
にて。ある風は何の気を付かどもこれく喜飛大夫が話合なとやうくと縮へて持喜世
この切り此所来すへて見物されるさ一九日以んおひまするま事。一日
二日のびされば。さふく出生で。持ますひと思ひ。是金三百両調へつつ。ちやあづけ
金さ短冊を此方ずれ。当大の方ちゆへ中よ焼のゆやにおもひ。今さまを
みわしゆへただでい当喜飛んむきさをせずコレ喜風れ何事とおも辞をのうす
ゆだうくふ給りて見させたるでよ安心でいよ此方は突実日切のさて今まうらく
と待て居る様をせられずなひさるによろく魚の為えて当く読みの要り。
また今日は短冊八ちの四分がいで。今日までも今さ出来るは何事

御家督さ。当也るとその根ぜんさく。近辺でゆるがるよ。道でて飲で帰り
あまりよべもきやく呼もうきおいされ。喜風むりと世上イヤサコリヤ
喜飛むも日切へ此の動かさ来ば此方へ来るなれかき内よ短冊を入て妻切り。
大夫が男なと人々ふ後をべきれ共たと此方へ一両のおやを来ざと決まる方
うかれく。お給をとらんすけをとたまさて科を々の往方日は来て流し二八
機嫌の根性。それおうくよひつくらつてゆうかる短冊を此方へ此方一両かも。
来がが方へ後でかくらへは若せへ二両気を試食でのかくさればもうちが両御さ
に。気がなひくらへ一札をされて来て見れ短冊のかりく二両の一此かずれよ入
くくべもし言おなを見んおく持り倦怠て気病されよ。此喜飛かはやよきね
幸さぞそくうそ当ひて気合よば。二三両世へ両より家おようのおやは
此の底てりしかこう人を〇て走る出すうりしやえる風れもし世へよゆひれ吾吉
来はひとやまさかが婦しいひとやまさが思へがごぶ至て世れは此れぬが。大三両さまへの

みよしのの子たち
くりーとあぶり
ねけいぶる
ぶる風
ちくまの
くるりむ

みよしの
おどろき
ぶる
くう泡く
ちろを
えんぐ
ぶる風を
たくうす
十男九
さく

此家の重宝宝剣が有とても手に入る上からは大切まで。まつらずつきあはせ
詮合しめされ。彦七の二度までは親の高名ともおほ難き。
女房まきれのいや奥の方とわたくしいたれむまする人の寝ておる所へ
婚ごみ。ひさまへ下りそれの木を割いろくさむらひの事并とおひけ。合ます
かまへ入てかわって。ハアと早雲殿の方へやんとお羽の鳥のいかにして合点が
あらぬ早雲の首と刀を六平人でハ六くらとふたりして。ささ人の物凡人の大事をかまへ
深くおひよそくささえ人の事をやそとも。いられつつ高名の女房とらへてはいやく。
思案して見よ。さんせ高名なれども。袖にすがりて涙にて沈みさしいそれくさと請け
さすら六。早雲の事をおかぞいかゞとへ仰天せられきろ。高名がまする人よ
膝をはなれ。コリヤ高名おのれも殺人と云ひ。いかにせしやうたる大事の重宝をまし
の方へとられし。夫が不忠。今が梅て。かひとも沈まず。さあもはやさて此分にて鋏へ
立梅てハ代々の重宝をぬすまれし。ふけり人々まとひ此文のおもて系図にたゞず

腹切て死るんより。せめて只の銭の名は海とおまはれ。村もさとひと刀ふり上げ。やおれバ
ヤアおのれが非を取とおまはして。付てんとさんと云ひつぶつ大奥をつかせ腰をさ
出せ追おせと。つかさくまで蔵の多くの宝の重をとり。捨そり。あげやまれ落せ
中おあくの事かや出て行け追おせば。取りてくれ。者のからも。いつかの武士であゝて
足よく刀をぬいて。切払ひ追つ。合物まず。ちかびしくいかのきさ上。大将
るまとバカ及ぶと是非をすべく。表白の追かされまひしまれ。ジうみの
そるふたりへ大勢の中をぬけ。文。ドロしと殺して。かれたちる間にも助けて
よふ声とおいけてまゐりさけひきされバ。ていとも高名まで引きまとりしかれ
様のあんで。おもろてハ数がめいて。とし追てあやまりのくれ
たいでこそ。イエ。さ高名やうにまゐるしが。そしれ共女とかのそれは一示
さえいけよるを抱く高名ところをかさねて。めてころちへ。させいとも。むつかしれ
引返二階へ門よりも格子をひいて。重なるほど寝具。みなそれハ遠で。もおから金

[illegible]人々こゝろよう流む。三藏のこゝろ[illegible]風ハ表に[illegible]
おさへて大勢ふせぎ拓きまへ。天神と[illegible]
あてゝ。三藏あぐ安ひ伯と廊の法師[illegible]
いつでも加ゆるゞ廊の作法男共[illegible]
城ゝ三藏。四[illegible]風ハ[illegible]
とかと秋ゝ[illegible]
[illegible]くゝけつまろびつゞ[illegible]
[illegible]伏ゝ[illegible]
傾き。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
三藏[illegible]表の[illegible]

[illegible]
[illegible]
くゝけつまろびつゞ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

和漢書物調進所
▲正下通西入掛町
堂阪弘通寺町東入
大坂瓦町油掛町
内海宝積堂
新古古書成文堂版
お働き持ち合せ
平清貨幣印行致す
大坂瓦町油掛町
内海宝積堂

宗

手が届きのさに二階より脱て入れば此ある山もあり山もあり谷もあり
てとあり山ごとに拵へ拵へれきまこ母の腕ふそれの拵へ拵へて拵れ
さそ備よ升乃巻後ある巻見ゞ夕の下まくまん祈と巻乃の清と
ながら〳〵拵へ〳〵今とぶ水〳〵仕り門〳〵いざやそうり鉢ようき伸り家と拳の
氏初と毎〳〵今ぞ青の紙年ともあれ。今年は無と有るくさんとやきれば。
きあでれざんとくのくあるる。片付とまゝ〳〵〳〵〳〵